

100 年前にカワセミを撮った男・下村兼史

－ 日本最初の野鳥生態写真家 －

インタビューシリーズ・第 2 弾

「野鳥に気づいて、命のドラマを知ろう」
(特別編)

ゲスト：安西英明 氏

(公益財団法人 日本野鳥の会・主席研究員)



《コガモ》撮影年不詳 千葉県新浜
撮影：下村兼史 所蔵：(公財) 山階鳥類研究所

目次

残暑の中、旅が始まる〈旅は若鳥の宿命〉	___ p.3
星空から渡り鳥の声〈1万キロをこえる旅〉	___ p.4
旅立つ夏鳥を見送ろう〈身近にも渡り途中の小鳥〉	___ p.6
ロシアからの使者に気づこう〈秋の水辺は要注意〉	___ p.8
見上げれば、渡り鳥〈秋空を渡っていく鳥たち〉	___ p.10

本プログラムについて

フジフィルム スクエアは、価値の高い写真作品を銀写真プリントで展示し、ご来館者に写真作品との出会いの場をご提供しています。また、作品への理解をさらに深めていただくために、ギャラリートークや講演会等の鑑賞サポート活動に力を入れており、2019年度には1万4千人以上の方々にご参加いただきました。

現在は新型コロナウイルスの影響で、写真展会場で行う鑑賞サポート活動は見合わせておりますが、新たな関連プログラムとして、特別ゲストへのインタビュー記事を公式ウェブサイトにて公開してまいります。

ご来館いただき写真展をご鑑賞いただいた方にも、ご来館されておられない方にも写真の魅力を知っていただき、作品制作の背景や意図等への理解を深め、お楽しみいただける機会となれば幸いです。また、本インタビュー記事が写真文化の価値を将来に伝えていくための有益な資料となることを願っています。

コロナ禍で開催中止となった野鳥観察会に代えて、公益財団法人 日本野鳥の会・主席研究員の安西英明氏にお話を伺い、前編、後編にまとめてご紹介してきました。9月30日まで開催される下村兼史展に合わせ、これからの季節に向けての野鳥観察について、さらに教えていただき、今回は特別編としてご紹介いたします。

残暑の中、旅が始まる〈旅は若鳥の宿命〉

—— 8月後半は、まだ残暑の厳しい暑さが続きますね。

安西 残暑の最中でも、巡る季節は秋へと向かいます。「命目覚める春」「命育つ夏」に続く「命つなぐ秋」は、「命耐える冬」に備えなくてはならない時期です。

—— 野生の命は、もう次の季節へと向かっているのですね。

安西 短い一生を終える秋までに交尾、産卵を済ませる虫の多くは、冬の寒さや乾燥に耐え、鳥の捕食からも生き残るだけの数を産む必要があります。すでに夜にはコオロギなどが鳴き始めています。オスがメスを呼ぶため、秋には交尾に至ることでしょう。

—— 植物はどうでしょうか。

安西 冬に光合成をお休みとする木々は葉を落とす前に紅葉しますが、秋は実を色づかせて小鳥に食べてもらう季節でもあります。虫が減ると小鳥は木の実も食べるようになりますが、丸呑みしてタネは糞で出すものが多いので、種子散布に貢献するのです。

—— 秋に実が色づく訳がわかりました。持続可能な自然の仕組みの一例と言えますね。野鳥にとっては、どんな時期ですか？

安西 野鳥の世界では夏に子育てを終えて、換羽によって新たな羽毛がセットされると、旅の季節となります。冬を生きのびるために、北から南へと渡る野鳥が少なくありません。

—— 寒い場所から暖かい場所へ移動するのですね。

安西 山地から低地へ移動するものも多くいます。また、春に生まれた若い鳥たちは新天地を求めなくてはならないので、夏の自立後から移動が始まっていることでしょう。

—— 移動というのは、冬を越す以外にも意味があるのでしょうか。

安西 若い鳥が移動し、分散することは近親交配を防ぎ、遺伝的多様性を保つ上でも重要ではないかと考えられています。

鳥類アトラスWEB版(鳥類標識調査 回収記録データ)

スズメ

Passer montanus

全長約15cm。雌雄同色。頭上と後頸は栗色。目先から頬が黒く、頬は白くて黒い斑がある。背は褐色で黒い縦斑がある。尾羽は角尾で褐色。下面是汚白色。嘴は太く短くて黒い。胸基部が黄色い個体もある。足は肉色。幼鳥(幼羽)は全体に淡色で、頬の黒斑は小さく薄い。

ユーラシアの温帯および亜寒帯に広く分布する。日本では小笠原諸島を除く全国で繁殖する。

平地から山地の市街地・農耕地などに生息する。人家の周囲に群って生息し、農村などで集落が消滅するとスズメもいなくなることが知られている。繁殖期には昆虫類・クモ類などを食べるが、ほかの時期は雑物の種子や果実を主食とし、秋には群れをなして水田を訪れる。




新放鳥数	15154	羽
移動回収	217	例
最長移動距離	396	km
最長回収期間	-	日
環境省レッドリスト	-	
希少野生動物種	-	
天然記念物	-	

【凡例】
 新放鳥数
 国内で足環を付けて放鳥された個体数
 移動回収
 回収総数のうち、放鳥地から5km以上離れた地点で回収された例数
 最長移動距離
 放鳥地から回収地までの距離が最も長かった記録
 最長回収期間
 放鳥日から回収日までの期間が最も長かった記録

移動データの Google Earth での閲覧はこちら

鳥類アトラス WEB 版 (<https://www.biodic.go.jp/banding/atlas.html>) より

—— 同じ種の中でも、遺伝的な交流があったほうがよいということですね。

安西 下村兼史の写真や資料が所蔵されている山階鳥類研究所のホームページからは「鳥類アトラス WEB 版」が閲覧できます。鳥類アトラスというのは、環境省生物多様性センターの鳥類標識調査の回収記録データで、野鳥に標識をつけて放し、その渡りなどを記録したものです。

—— どんなことがわかるのですか？

安西 例えば、スズメを検索すると、移動回収事例が 217、最長移動距離 396kmと掲載されていますが、多くはその年生まれの若い個体が秋に移動しているそうです。

—— 1 年中普通に見られる野鳥でも、1 羽ずつ調べると移動しているものがあるということですね。

星空から渡り鳥の声 〈1 万キロをこえる旅〉

安西 秋は、日本で子育てを終えた夏鳥が東南アジア方面で冬を越すために、南への渡りを始めます。一方、ロシアで子育てを終えた冬鳥が日本に飛来し始めます。

—— 夏鳥や冬鳥の渡りは、海を越え、数千キロにも及びそうですね。

安西 数千キロで驚いてはいられません。旅鳥のシギたちには、北極で繁殖してオーストラリアやニュージー

ランドで冬を越すものもいて、片道1万キロを超えるでしょう。

—— 渡り鳥には、夏鳥、冬鳥のほかに、旅鳥もいるのですか？

安西 春夏に見られる夏鳥は日本で繁殖し、秋冬に見られる冬鳥はロシアなどで繁殖した後、日本で冬を越すために渡ってきます。日本より北で繁殖して日本より南で冬を越すために、渡り途中に日本で見られるのが旅鳥です。

—— いろいろな渡り鳥がいますし、同じ鳥でも地域によって見られる季節が違うことになりますね。

安西 残念ながら、今回の写真展で企画されていた映画上映はコロナ禍で中止になってしまいましたが、下村映画の傑作『或日の干潟』（1940年）に登場するシギの仲間は、日本で60種ほど記録されています。

—— たくさんいるのですね。

安西 そのシギたちの多くが繁殖地に向かう北上と、越冬地に向かう南下の途中に日本列島を通過する旅鳥です。北上は春の一時期ですが、南下は夏から秋にかけてで、干潟や田んぼなどの水辺には暑い盛りからシギたちが飛来します。北上するのは冬を生きのびた一部ですが、南下するものは北極で生まれた若い鳥も含まれるので数は多くなります。

—— 春に生まれた子が、夏から秋には1万キロにおよぶ渡りを始めるなんて、凄いですね。



キアシシギ

「ムクドリくらいのサイズで、ロシアから南半球に至る渡りを繰り返す旅鳥。ピューイピューイと秋の夜空から降ってくる声を河童の声としてきた地域もあるらしい」
(イソシギはスズメより大きい程度だが、長距離を渡るシギの仲間にはスズメサイズも少なくない)

安西 長距離の渡りは夜に行われるので、夏から秋の夜には、渡るシギたちの声を住宅地でも聞くことがあります。声が降ってくるのは決まって星空からで、彼らは地磁気や天体などから方向を察知すると考えられています。

—— 夜は見えない、飛べないと思っていましたが、実際は違うのですね。

安西 私が東京の自宅で、秋の夜、時折耳にするのはイソシギのチーリーリーという声です。イソシギは日本で1年中見られるように書かれている図鑑が多いのですが、北海道では春夏しか見られず、沖縄では秋冬しか見られないので、秋に南下、春に北上するイソシギがないはずがありません。

—— イソシギは北海道では夏鳥、沖縄では冬鳥になりますし、旅鳥もいることになりますね。

旅立つ夏鳥を見送ろう 〈身近にも渡り途中の小鳥〉

安西 日本の山地で繁殖したキビタキ、オオルリなどのヒタキ類、ムシクイの仲間などは、9月から10月にかけて南に渡っていく夏鳥です。シギたちと同じく夜に渡りますが、一晩で渡りが終わるはずはないですね。

—— そうですね。



キビタキ（オス成鳥）

「図鑑や写真で見ると目立ちそうなオスも、スズメより小さく、緑の中にとまかなかなか見つけれない。春の渡り途中はさえずることで気づけるが、秋はほとんど鳴かないので、庭にいても気づかないようなことが多いはず」



キビタキ（若鳥）

「秋の渡りは繁殖後なので、地味なメスに似た若鳥が多い。ちなみにオオルリのメスはキビタキのメスや若鳥に似ているが、スズメと比べると少し大きい」

安西 朝には地上に降りて休んだり、食料補給も必要なので、渡り途中には庭や公園、街路樹のような身近な緑地で見かけることもあります。

—— 朝早い時間であれば、身近でも観察できそうですね。

安西 これらの夏鳥は、身近な場所では渡りの時期だけ通過する旅鳥とも呼べます。ただ、ヒタキやムシクイの仲間はスズメより小さい小鳥が多く、繁殖後はさえずらないこと(さえずりは繁殖期のオスだけが普通)、派手なオスより地味なメスや若い鳥が多いことなどから、見過ごされることも多いはずです。

—— 見つけるためのポイントはありますか？

安西 気づけたとしても茂った緑の中において色や模様がわからないことも多いので、動き方に注目しましょう。

—— 動き方ですね。

安西 スズメの場合、繁殖期以外はタネを主食としていて動きに機敏さがありません。虫を主食にしている小鳥は比較的活発に動く傾向があり、ムシクイたちはチョコマカ細かく動き回って虫を探していることが多いです。

—— 秋はスズメと比べた動き方に注目すると、渡り途中の野鳥にも気づくことができそうですね。



ムシクイの仲間

「ムシクイの仲間は茂みの中において、葉っぱのような色をしているので気づくこと自体が簡単でない。何種もいるが、姿は似ていて声の違いから種を識別できるものの、秋はさえずらないので種まではわからないことが多い」

安西 ヒタキ類は飛んでいる虫を飛び立ってキャッチするので、枝にじっととまっても飛び立つ際は鋭さ、素早さがあります。

—— のんびり飛び立つようでは、飛んでいる虫は捕らえられませんね。

安西 オオルリはスズメと比べると少し大きい小鳥ですが、ムシクイの仲間はメジロくらいで、体重はおよそ10グラム前後しかありません。

—— 10グラム！そんな小さな命が海を越えてやってくるなんて、本当にすごいですね。

安西 砂糖小さじ2杯程度の重さの小鳥が、ペアとなって子育てし、海を越える渡りを繰り返しているドラマに想いをめぐらすと、いとおしく、応援してあげたくありませんか？

—— 感動しますね。応援したくなりました！

ロシアからの使者に気づこう 〈秋の水辺は要注意〉

—— 近所の水辺でカモの仲間を見かけますが、カモも渡ってくるものがありますか？

安西 カモの仲間は日本で40種ほどになりますが、ほとんどが冬鳥です。1年中、普通に見られるのはカ



衣替えが始まった頃のマガモのオス
「写真は地味な夏の姿から衣替えが始まって、メスとは違った姿になりだしたところ」



衣替えが完了したマガモのオス
「秋に衣替えが完了すると緑に輝く頭部など、派手な姿になる」



カルガモ

「カモ類のオスは冬に求愛するため、秋にメスに似た地味な姿から派手な姿に衣替えする。カルガモは例外でオスが派手になることはないので、秋のはじめに飛来するカモ類（オスがまだ地味な頃）はカルガモと思って見過ごしやすい」

ルガモだけなので、池や川では要注意です。カルガモでないカモがいたら、冬鳥のカモ類の可能性が高いですよ。

—— カルガモでないカモは、どうやって見分けたらよいですか？

安西 図鑑に載っているような派手なオスが見られるのは秋以後になるので、オスがまだ地味な飛来当初にカルガモと見分けるには、くちばしに注目しましょう。カルガモは黒いくちばしの先だけ黄色いのですが、そのようなくちばしのカモ類は他にいません。

—— わかりやすいですね。初心者の私でも見分けられそうです。

安西 カモメの仲間も40種以上になりますが、全国的に1年中見られるのはウミネコだけ。つまり、これから、ウミネコでないカモメがいたら、冬鳥のカモメ類と考えられます。

—— カモメの仲間の中で、ウミネコを見分けるポイントがありますか？

安西 カモメ類はどれもよく似ていますが、尾羽に黒い帯があるのはウミネコだけで、飛ぶとよくわかりますよ。

—— 尾羽の黒い帯ですね。



ウミネコ

「カモメの仲間としての特徴は細長い翼で、とまっているときには翼の下に尾羽が位置する。翼の先と尾羽を間違えやすいが、この写真では後方に突き出した翼の下に尾羽が見えている」

安西 なお、カモ類やカモメ類の多くはロシアに繁殖地があるのでそこから飛来するものが多いはずですが、一部にアラスカ方面から飛来するものもいます。

見上げれば、渡り鳥〈秋空を渡っていく鳥たち〉

—— 身近で気づいた鳥が、はるか遠くへ渡っていく鳥、はるか遠くから渡ってきた鳥だとわかると、ワクワクしますね。

安西 渡りという壮大なドラマに想いをはせるだけでなく、秋は、今まさに渡っている姿を見ることがもできます。

—— 明るい時間帯に渡りをする鳥もいるのですか？

安西 長距離の渡りは、気温が高くなく、気候が安定していて、天敵が少ない夜に多いものと考えられていますが、タカの仲間やヒヨドリは例外で、朝から渡りを始めます。

—— そうなんですね。いつ頃から、どんな場所で見ることができますか？

安西 9月から10月、全国的に、都市部でさえ見ることができますよ。

—— 身近でも観察できそうですね。

安西 タカの仲間のサシバなどが集中して渡る場所は、渡りの名所として多くの人も見物に訪れますが、名所でもなくても秋は1羽、2羽で渡っているタカがいます。

—— なかなか見たことがない人も多いと思いますが、やはり気づきにくいものですか？

安西 気づかれない理由は、タカは大きい鳥と思われているからではないでしょうか。

—— 実際はそんなに大きくないのですか。

安西 ハンターであるタカやハヤブサには機敏さが必要、特に小鳥を狩るには大きいほど不向きになります。ハトサイズ、大きくてもカラスサイズまでが一般的で、トビより大きな種はあまりいません。

—— 思っていたよりずっと小さいのですね。

安西 サシバはおよそハシボソガラスほどの大きさで、ハシブトガラスよりは小さいくらいです。タカの仲間を見分けるポイントとして、カラス類と飛び方を比べてみましょう。はばたきはカラス類よりより浅く早いこと、はばたかずに滑空する時間が多いことがタカの仲間の特徴です。

—— 今からカラスの飛び方に注目しておくといいですね。ヒヨドリの渡りはいつ頃、見られますか？



渡るヒヨドリの群れ

「9月中旬を過ぎる頃から、朝、数十羽から200羽くらいの群れになって南や西に移動する群れが見られる」



ヒヨドリ

「ヒヨドリは、スズメとハトの中間サイズでムクドリほど。尾が長いので、近くではムクドリより大きく見えるかも知れないが、遠くを飛んでいるとスズメほどにしか感じない」

安西 ヒヨドリは「ヒーヨ、ヒーヨ」と1年中騒がしいと思われているかも知れませんが、実は8月から9月の一時期、静かになります。

——なぜですか？

安西 換羽期だからです。9月中旬頃から声が聞かれだしたら、渡りが始まると思ってください。

——なるほど。換羽が終わると再び声が聞かれるようになって、渡りも始まるということですね。

安西 日本近辺にしか分布しないヒヨドリですが、全国的に、南や西に移動する群れが見られます。どこからどこまで移動するのか、よくわかっていませんが、朝に飛び始めて日が高くなると飛ばなくなるので、短距離の移動を繰り返しているように思えます。

——身近でも「鳥が渡っている」「渡り鳥がいる」と気づくだけで、世界がぐっと広がりますね。前編、後編で教えていただいた「命育つ夏」のドラマ、そして特別編の「命つなぐ秋」のドラマ、コロナ禍でも、身近でいろいろ観察することができそうです。

安西 下村が写真で記録しようとしたあるがままの野鳥たちの姿は、自然界の命のドラマの一場面です。生き残るほうがずっと少ない野生の命のドラマは厳しく、切なくもなりますが、その舞台である巡る季節の確かさ、懐かしさには、安堵させられ、癒されもするのではないのでしょうか？

——本当ですね。安西さん、このたびは貴重なお話をありがとうございました。

安西 ありがとうございました。皆様におかれましても暑い季節を乗り切って、命のドラマとともに巡る季節を味わってください。

聞き手：大澤友貴（フォトクラシック）

● ゲストプロフィール

安西英明（あんざい・ひであき）

1956年、東京生まれ。1981年、日本で初めてのサンクチュアリ「ウトナイ湖サンクチュアリ」にチーフレンジャーとして赴任する。現在は日本野鳥の会・主席研究員として、野鳥や自然観察、環境教育などをテーマに講演、ツアー講師などで全国や世界各地を巡る。解説を担当した野鳥図鑑は45万部以上発行。テレビやラジオなどでも活躍中。

現在、公益財団法人 日本野鳥の会・理事および主席研究員。公益社団法人 日本環境教育フォーラム・理事。苫小牧観光大使。公益財団法人 日野自動車グリーンファンド・評議員。

フジフィルム スクエア 写真歴史博物館 企画写真展
関連プログラム

100年前にカワセミを撮った男・下村兼史 - 日本最初の野鳥生態写真家 -

インタビューシリーズ・第2弾

「野鳥に気づいて、命のドラマを知ろう」（特別編）

ゲスト：安西英明氏（公益財団法人 日本野鳥の会・主席研究員）

展覧会

会場：フジフィルム スクエア 写真歴史博物館
会期：2020年7月1日（水） - 9月30日（水）

主催：富士フィルム株式会社

特別協力：公益財団法人 山階鳥類研究所

協力：公益財団法人 日本野鳥の会、有限会社バード・フォト・アーカイブス

監修：公益財団法人 山階鳥類研究所

後援：港区教育委員会

企画：フォトクラシック

記事

公開日：2020年8月20日

発行：富士フィルム株式会社 宣伝部

写真提供：金子精一・光江（pp.5-11）

編集：フォトクラシック

デザイン：脇野直人

© 富士フィルム株式会社 禁無断転載